



#03

出合いはまるで稲妻のよう

著：藍澤たすく
イラスト：(C)ふんぷもかもめ遊羽

CO

リヨウはコンビニの前に立っていた。

何か用事があるわけでも、待ち合わせがあるわけでもない。ただ単に、ぼーっと立っていた。彼から5メートルほど離れたコンビニの駐車場には、見るからに軽薄(けいぱく)そうな茶髪・ピアスの若者が数人、うんこずわりでたむろしている。いつもの、見慣れた光景だ。

そしてリヨウは彼らとは関わり合いにならないように、極力(きょくりきょく)気配を消してぼーっと立っている。夏の香りを漂わせ始めた日差しが少しだけ肌に痛い。

女の子がやって来た。

地元の高校の制服を着ているからこの辺の子だろうが、リヨウは初めて見る顔だった。

鳶色(とびいろ)の瞳、長い睫毛。サイドで結ばれた艶やかな髪。すつと通った鼻梁(びりょう)と、きりりと引き結ばれた唇。どこか凛(りん)とした雰囲気(まじまじ)を纏(まと)ったその少女は、文句なしの美少女だった。

「よー、姉ちゃん、まぶいじゃん。俺達と遊んでかねー?」

鼻ピアスが死語満載のナンパを仕掛けるが、少女はガン無視してその前を通り過ぎようとする。

「おい、ちよつと待てよぶぎっ!」

ひゅっという風切り音がした瞬間、鼻ピアスのこめかみに少女のハイキックがめり込んでい

た。鼻ピアスはそのまま音もなくその場に崩れ落ちる。

「て、てめえ、ぼごっ!」

「女だと思っぐはっ!」

「た、助けてくれんざいむっ!」

正拳(せいけん)突きに膝蹴(ひざげ)り、そしてまたハイキック。少女はあつという間に不良全員をKOしてしまつた。

あまりの展開にリヨウは呆然(ぼうぜん)と立ち尽くす。

そして思った。

ハイキックの時、都合2回見えた青の縞(しま)パンはめっちゃ眼福(まなま)であったと……。

不意に少女は振り返り、リヨウをきつと睨(にら)みつけた。そしてそのまま、つかつかとリヨウに歩みよってくる。

(えっ……俺? なんかもまずいことした? ……まさか今、俺「縞(しま)パン最高」とか声を出して

言っただとか!)

パニクるリヨウの眼前に少女は迫りつつあった。

そしてリヨウの目の前に立った少女は、ただ無言でじつとリヨウを睨(にら)みつける。

真剣な眼差しだった。

リヨウはテンパっていた。正直、同じ年頃の少女と話した経験など片手で足りるぐらいしかないのだ。こんな時、なんと言えばいいのか、リヨウはまったく判らなかつた。どうしよう。何か気の利いた言葉、気の利いた言葉、この場に合った言葉……。

「イラッシャイマセ」

最悪だあー！

リヨウは口を衝いて出た自分の台詞に絶望した。いやむしろ死にたくなつた。

なんだよ「イラッシャイマセ」って！

俺、ここの店員じゃねえし！

しかも緊張して声、裏返つてたし！

あああああ、穴がなかったら掘りたい！掘つても入りたくない！

しかし心の中で七転八倒するリヨウをよそに、少女は変わらない様子でリヨウを見つめ続けている。

……あれ？　なんか様子がおかしくね？

そして少女はそのまま、小さな白い指先をリヨウの身体の上に這わせ始めた……!?

右から左、左から右……。

悩ましげな表情でリヨウを指先で撫で続ける少女。その真剣な瞳で、リヨウを変わずに見つめている。心なしか、その頬も赤い。

これは、あれか？

もしかして、この子、俺のこと好きなんじゃ……。

いや、まさか！

バン！

突然リヨウは胸を叩かれた。

何のことか判らず、リヨウは硬直する。

二人の間に、完全な沈黙が訪れた。

バン！

バン！

間隔をあけて少女が同じ場所をまた叩く。

え？ なに？ これはどういうこと？

言葉にならない想いを俺に伝えてるってこと？ そうなの？ そういうことなの!?

……よし、そういうことなら俺も男だ！

君の気持ちに伝えて、今、とびきり熱い抱擁を……！

ドガツ！

リヨウの目に本日3回目の縞バンが映った。と同時に、彼の意識がブラックアウトする。

なぜなら少女のハイキックが、リヨウのこめかみに深く深く入りこんでいたからだ。

少女はびくりともしなくなったりリヨウをしばらく観察したあと、あきらめたように息をついた。

そしてそのままコンビニに入り、開口一番、こう大声をあげたのだ。

「すいませーん！ おもての自販機壊れてるみたいなんですけどー！」

コンビニの自販機に取り憑いてはや15年目の付喪神・リヨウ。

彼が人間の気持ちを本当に理解するのには、まだまだ時間がかかりそうだ……。

おしまい